

(第3種郵便物認可)

今年、20世紀前半の日本の進路を決めた重要なポイントの一つ、満州事変から80年にあたる。国際日本文化研究センター（京都市西京区）は、近現代の日系移民の足跡をたどる資料の発掘整理に力を入れ、とりわけ中国東北部については、国際的な視野に立つ「満州小事典」の編集に着手した。そのためのシンポジウムを3月に開催し、中国東北部研究の老大家、呂元明氏や、中国、台湾、韓国の研究者を招いた。呂氏は、自らの監修にあたる事典の項目の一つに、「苦力（クーリー）」（中国人労働者）を立てることを提案した。ダム

満州事変80年の記憶と記録 鈴木貞美

事実刻む「小事典」編集へ

建設や道路敷設など「満和」の旗が、ひととき高揚した。中国人や朝鮮人農民も「食糧増産」に励むよう要請された。開拓民にも重くのしかか

た。貧弱な栄養しかとれず、医者も不足するなかで、祖国に食糧を送るための過酷な農作業に励む開拓民たちは、若い娘たちまでバタバタと倒れていた。それを、小説「海に生くる人々」で知られる作家の葉山嘉樹（1894～1945年）が、エッセー「増産戦」に書きとめていた。葉山はプロレタリア文学に抜群の力を発揮したのち、転向した。その後「満州国」に何度も渡り、官憲に見張られ、開拓民から目を見せつけられた。



葉山嘉樹（日本近代文学館提供）

葉山嘉樹「増産戦」の意義

葉山はプロレタリア文学に抜群の力を発揮したのち、転向した。その後「満州国」に何度も渡り、官憲に見張られ、開拓民から目を見せつけられた。



すすき・さだみ 1947年山口県生まれ。近代日本文学研究者。著書に「日本の文化ナショナルリズム」「日本文学」の成立」など多数。

葉山の日記には、400字詰め原稿用紙9枚の「増産戦」を「満州日日新聞」に寄稿したことが記されていたが、掲載日が不明だった。呂氏がこのたびの調べで、43年10月21～23日、3回にわたって分載されていたことがわかった。呂氏は、葉山のエッセーと「満州小事典」の企画をわれわれに託して、また春の遠い長春に帰っていった。（国際日本文化研究センター教授）